

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典に見えるギンバイカ
Author(s)	水谷, 智洋
Citation	プロピレア , 23 : 111 - 120
Issue Date	2017-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044341">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044341</a>
Right	Copyright (c) 2017 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



## 古典に見えるギンバイカ

水谷 智洋

標題の「ギンバイカ」を見て、植物名のようなのだが、よく知らない、とおっしゃる方が大半でしょう。では、ゲーテの「ミニヨンの歌」の第4行、*Die Myrte still und hoch der Lorbeer steht* が鷗外によって「ミルテの木はしづかにラウレルの木は高く」と訳された、あの「ミルテ」の現在の名称なのですよ、と御説明したらどうでしょうか。ああ、あのミルテか、しばしば目にするが、やはり実物は知らない、という反応が依然多くを占めることに変わりはないかもしれません。その後、なぜか「桃金嬢」、その音訳（？）の「天人花<sup>てんにんか</sup>り」が「ミルテ」に代わったかのように見うけられますが、その奇妙な名称—特に前者—からなんらかの植物なり花なりのイメージが得られるとも思えず、その実態は知られないままで今日に至っているかのようです。ですが私には、たまたま出会ってから、約30年の長きにわたって馴れ親しむことになった、格別に忘れ難い植物なのです。

1989年4月、小金井市は、町に緑をふやそうという趣旨からのサービスだったのでしょうが、小学校に入学する児童にギンバイカの苗木を配布する（むろん、希望者のみに）と告知しました。市報に教えられるまでもなく、ギンバイカがアプロディーテー・ウェヌスの聖木だったことを知っていた私は、この知らせにとびつきました。自宅に庭らしい庭もないにもかかわらずです。やがて、わが子が持ち帰った苗木を隣家との間の狭いスペースに下ろしたところ、予想外のことが起きました。乏しい陽光、やせた土という悪条件にもかかわらず、苗木は育ち、やがて梅の花を小さくしたような白い花をつけ、実を結ぶようになりました。おそらく、陽光を浴びるためには上に伸びる他はない、私のけなげなギンバイカはそう判断したのでしょう、ついには5m程の高さにまで達したのです。私はその

様子を日々眺めては、古代人の心情に思いを馳せていた、といえなくはないような気がします。

しかし去年、私はこの木に別れを告げねばなりませんでした。西隣の市に転居したからです。今回、雑文のテーマにギンバイカを選んだのも、今は、たぶん、引っこ抜かれてしまったであろう、あの木への追懐の情のなせるわざに他なりません。

はじめに、邑田仁監修『新訂 原色樹木大圖鑑』（北隆館、2004）、524頁の説明と、本田正次他監修『原色 園芸植物大圖鑑』（北隆館、1984）、291頁所載の図を掲げておきます。このうち、果実の説明にご注目。ギンバイカの実は食べられるのですよ。もっと早く知っていたら試してみたのに、と私が残念でならない部分です。

### ギンバイカ

*Myrtus communis* L. [フトモモ科ギンバイカ属]

(英) Myrtle, Common Myrtle, True Myrtle

(漢) 銀梅花、祝いづいの木、銀香梅

[原産地] 中近東、地中海沿岸。日本には明治末年頃渡来した<sup>2)</sup>。… [自然環境] ヨーロッパやアラビアで古くから栽培されている常緑低木。[用途] 庭園樹、鉢植え、切花、香料、ヨーロッパでは結婚式の花輪とする。[形態] 高さ2～3m<sup>3)</sup>、枝は密生し、自然に整った樹形になる。葉は対生または3輪生し、短柄、葉身は卵形～皮針形で先端はとがり、全縁。長さ3～5cm。革質で光沢があり、傷つけると芳香がある。雌雄同株で、開花は5～7月。葉えきから白色で花径2cmぐらいの花を1個上向きにつける。がく片5枚、花弁5枚、雄しべは多数で長い。果実は液果で秋に黒青色に熟し、球形で径1.3cmぐらい。果肉は芳香があり、甘く食用となる。…



さて、ギンバイカのラテン語名はその学名から *myrtus*, *murtus* と容易に知れませんが、ギリシア語名は *μυρσίνη*, Att. *μυρρίνη*、果実はギリシア語 *μύρτον*、ラテン語 *myrta* です。以下、ギンバイカの木と木立、小枝、小枝を編んだ冠、果実の順に見て行くことにします。

(1) Theophrastos, *peri Phytōn Historia* (lat. *Historia Plantarum*) 4.5.3

τῶν δὲ ἡμερουμένων ἤκιστα φασιν ἐν τοῖς ψυχροῖς ὑπομένειν δάφνην καὶ μυρρίνην, καὶ τούτων δὲ ἦττον ἐτι τὴν μυρρίνην· σημεῖον δὲ λέγουσιν ὅτι ἐν τῷ Ὀλύμπῳ δάφνη μὲν πολλή, μύρρινος δὲ ὅλως οὐκ ἔστιν.

栽培される植物のなかでは、ゲッケイジュとギンバイカが寒さに耐性がなく、そのうちでもギンバイカはとりわけ耐性がないという。その証拠に、オリュンポス山にはゲッケイジュがたくさんあるが、ギンバイカはまったくな

いといわれている<sup>4)</sup>。

植物学の祖テオプラストス（前 371 頃—287 頃）『植物誌』中の一文です。オリュンポス山のあたりはそれほどの寒冷地なのか、私はよく知りませんが、ギンバイカが温暖な地方を好むことは確かでしょう。上記の引用のすぐ後（4.5.4）には、「プロポンティス地方では、ギンバイカもゲッケイジュも山地の多くの場所に生えている。<sup>5)</sup>」との記述も見出されます。『植物誌』より、もう 1 カ所引いて見ます。

## (2) テオプラストス『植物誌』 5.8.3

ラティウム地方はどこもが湿っている。平地にはゲッケイジュやギンバイカ、素晴らしいヨーロッパブナが生えているが、……。キルカイオンと呼ばれているところは高くそびえた岬だが、びっしりと木が茂っており、オーク類やたくさんのゲッケイジュやギンバイカが生えているという。現地の住民はそこにキルケが住んでいたと言っており、エルペノルの墓を見せるそうだが、そこには、他のギンバイカは大きな木になるのに、まるで花冠用といえそうなギンバイカが生えているという<sup>6)</sup>。

『植物誌』のこの箇所（5.8）は、数少ない西方についての情報を伝える章として有名の由です。「ラティウム地方」とは、むろん、ローマ市を含むイタリア中西部地方のこと。「キルカイオン」「キルケ」「エルペノル」はそれぞれ *Κίρκαϊον*, *Κίρκη*, *Ἐλπήνωρ*。エルペーノールはオデュッセウスの部下のひとりで、女神キルケの館の屋根から落ちて死んだのを、のちにオデュッセウスがその墓を造ってやったことになっています。「まるで花冠用といえそうなギンバイカ」*μυρρίναι καθάπερ αἱ στεφανώτιδες* は、小ぶりのギンバイカの意と解されます。なお、1 世紀の Plinius, *Naturalis Historia* 『博物誌』 15.119 には、(myrtus) *primum Cerceis in Elpenoris tumulo visa traditur* 「(ギンバイカは) キルケイイ岬のエルペーノールの墓ではじめて見られたと伝わる」とありますが、嘘です。地中海沿岸ならどこでも自生していた筈だからです。

(1) (2) は特定の場所におけるギンバイカの情報ですが、都市の近郊ではごく普通に栽培されていたようです。

(3) Cato, *de Agri Cultura* 8.2

Sub urbe hortum omne genus, coronamenta omne genus, bulbos Megaricos, murtum conjugulum et album et nigrum, loream ..., nuces ..., haec facito uti serantur.

都市近郊の庭園にはあらゆる野菜、花冠をつくるためのあらゆる花々、タマネギ、conjugulus 種と白と黒のギンバイカ、(各種の) ゲッケイジュ、(各種の) ナッツを植えるがよい。

カトー (前 234—149) 『農業論』の一節です。murtus conjugulus とはどんなギンバイカか分かりませんが、「白と黒のギンバイカ」は白い実をつける木と黒い実をつける木と解されますから、少なくとも3種のギンバイカが必須の栽培植物であったわけです<sup>7)</sup>。

こうして植えられたか、あるいは自生している複数本のギンバイカを指す語として、ギリシア語 μυρσινών, Att. μυρρινών、ラテン語 myrtetum, murtetum があります。本稿ではこれを「ギンバイカの木立」としておきます。ギンバイカに「森」はそぐわないと思われるからです。

(4) Aristophanēs, *Batrakhoi* (lat. *Ranae*) 154-7

HP. ἐντεῦθεν αὐλῶν τίς σε περίεισιν πνοή,  
ὄψει τε φῶς κάλλιστον, ὥσπερ ἐνθάδε,  
καὶ μυρρινῶνας, καὶ θιάσους εὐδαίμονας  
ἀνδρῶν γυναικῶν, καὶ κρότον χειρῶν πόλυν.

ヘラクレス その次に笛の音が風に漂い、お前を包む、  
そして美しい光を見るだろう。ちょうどこの世のような。  
それからミルトの木立、 ついで幸多き  
男女の群れと賑わしい手拍子の音<sup>8)</sup>。

アリストパネースの喜劇『蛙』(前 405 年上演) の一齣で、ヘーラクレースがディオニューソスに、冥府のアケロンの湖水を渡ったら、うるわしい光景を目にするよ、と教えています。そして、この人たちは誰かね、との問いに、οἱ μεμνημένοι (158) 「秘教入会者たち」と答えています。これらの秘教入会者とギンバイカの関係は後述される筈です。ここで私たちは、冥府にギンバイカの木立が

あるという現象に若干の驚きを覚えるかもしれませんが、Vergilius (前 70-19)、*Aeneis*, 6. 443-4 でも、冥府の *Lugentes Campi* 「嘆きの野」に *myrtea silva* があることになっていますから、喜劇・英雄叙事詩の別を問わず、なんの不思議もないことなのでしょう。

*myrtea silva* とほぼ同義語と思われる *myrtetum*, *murtetum* は、カンパーニア地方の温泉地 *Baiae* 近郊のそれが有名であったようです。抒情詩人 Horatius (前 65-8)、*Epistulae* 1.15.5、1世紀前半の Celsus, *de Medicina* 2.17.1、エピグラム詩人 Martialis (40 頃—103/4) 3.58.2 に言及があります。前二者は自生の木立、最後のは、詩人のある友人の別荘に *platanus* プラタナス、*buxus* ツゲとともに植えられたギンバイカの木立です。

次は、ギンバイカの枝についてです。この木には大枝のようなものはなく、小枝が密生します。そして常緑樹ですから、光沢のある小さな葉が対生する小枝は、1年のいつでも若枝の様相を呈します。

#### (5) Euripidēs, *Ēlektra* 323-5

ΗΛ. Ἀγαμέμνονος δὲ τύμβος ἠτιμασμένος  
οὐπὼ χοάς ποτ' οὐδὲ κλῶνα μυρσίνης  
ἔλαβε,

エーレクトラー アガ멤ノーンの墓は辱められたまま、  
まだお酒も、ギンバイカの小枝も  
供えられていません、

エウリーピデースの悲劇『エーレクトラー』（前 417 年頃上演）で女主人公が嘆きます。そしてこの少し後で、旧主の墓に立ち寄ってきたという老人が彼女の嘆きに応えます。σπονδάς τε ... / ἔσπεισα, τύμβῳ δ' ἀμφέθηκα μυρσίνας. (511-2) 「わたくしは酒を注いでお神酒とし、お墓にギンバイカをお供えしました。」512 行に κλών の語はありませんが、供えたのは若枝に決まっています。わが国でなら、シキミ（檜）の枝といったところでしょうか。ですがギンバイカの用途は、とうていシキミの比ではありません。

#### (6) Aristophanēs, *Nephelai* (lat. *Nubes*) 1364-5

ΣΤ. ἔπειτα δ' ἐκέλευσ' αὐτὸν ἀλλὰ μυρσίνην λαβόντα

τῶν Αἰσχύλου λέξαι τί μοι·

ストレプシアデス ところが、それから後で天人花の枝を一つ渡すようにして、  
まあ、いいから、これで一つアイスキュロスの芝居の科白を何かやってみてくれと頼みますと、

アリストパネース『雲』(前423年上演)のなかで、ストレプシアデースが息子のペイディッピデースになにかアイスキュロスの一くさりをやってくれと頼みます。すると息子は、アイスキュロスなんぞ古くさくって、と頭ごなしに拒否します。かわりにエウリーピデースの(旧弊な親父から見たら)破廉恥きわまりないくだりを歌う。そこでいきおい派手な親子喧嘩に…、と父親がいきさつを語る箇所です。ここで私たちの関心は、むろん、ギンバイカ(の枝)です。なぜここにギンバイカが出るのでしょうか。アリストパネース『蜂』(前422年上演)1222aの古注にその答えがあります。

#### (7) Scholia in Aristophanis Vespae 1222a

τὰ σκόλι' ὅπως δέξῃ καλῶς· ἀρχαῖον ἦν ἔθος ἐστιωμένους ἄδειν ἀκολούθως τῷ πρώτῳ, εἰ παύσαιτο τῆς ᾠδῆς, τὰ ἐξῆς, καὶ γὰρ ὁ ἐξ ἀρχῆς δάφνην ἢ μυρρίνην κατέχων ἦδε Σιμωνίδου ἢ Στησιχόρου μέλη ἄχρις οὗ ἤθελεν, καὶ μετὰ ταῦτα ᾧ ἐβούλετο ἐδίδου, οὐχ ὡς ἡ τάξις ἀπῆται. καὶ ἔλεγεν ὁ δεξάμενος παρὰ τοῦ πρώτου τὰ ἐξῆς, κάκεῖνος ἐπεδίδου πάλιν ᾧ ἐβούλετο. ...<sup>9)</sup>

「(あなたが) スコリオンをうまくつけられますかね。」 酒の席では、歌を歌いはじめた者が途中で止めると、次の者がそのつづきを歌うという古くからの仕来りがあった。歌いはじめた者はゲッケイジュかギンバイカ(の枝)を手にして、シモーニデースかステーシコロスの歌を好きなどころまで歌ってから、席順にはとらわれず、これぞと目をつけた者に(枝を)渡した。最初の歌い手から(枝を)受け取った者はそのつづきを歌い、その人もまた狙いをつけた者に(枝を)手渡したのである。…<sup>9)</sup>

上の引用文中、最初の5語は『蜂』1222行の台詞の一部です。次にその1222行を見てみましょう。



(8) Aristophanēs, *Sphēkes* (lat. *Vespa*) 1222

ΒΔ. τούτοις ξυνὼν τὰ σκόλι' ὅπως δέξει καλῶς.

ブデリュクレオン こんな連中とうまくスコリオンをつけられますかね。

「こんな連中」とはクレオンとその一派の6人、そこへピロクレオン（「クレオンびいき」）とブデリュクレオン（「クレオンぎらい」）の親子が加わって、スコリオンをつけようというのです。ここでスコリオンとは、高津先生の説明を借りれば<sup>10</sup>、「連歌に似たものであって、最初にある題について一人が歌うと、次の男はそれにうまく合わせて次の歌をつくる。このようにして次々にまわして、全体がある種の関連を持っているようにつくられる。」息子は、父親が一癖も二癖もありそうな連中との宴席で、どんなお題にも当意即妙に具合よく歌いつぐことができるか、危惧しているのです。そこで試験を試してみる、といいます。「私がクレオンになって、ハルモディオスという題ではじめますから、あなたが受けるのですよ。[歌って] ‘οὐδείς πώποτε ἀνὴρ ἔγενετ’ Ἀθήναις’ (1226) 「アテナイの市にはいまだかつて」。すると父親が「‘οὐχ οὕτω γε πανοῦργος [ὡς σὺ] κλέπτῃς.’ 「汝のごとき悪徳の盗賊はなかりき」と後をつづけます。息子は仰天して、「そんなことをするつもりですか。…酷い目にあいますよ。」(1224-8) このやりとりに ギンバイカの名は出ませんが、もし実際に宴が催されたのであれば、当然、その小枝が行き来したことでしょう。

同じ喜劇詩人の『女の平和』（前411年頃上演）には、実際のスコリオンの一部を引用した台詞が見られます。

(9) Aristophanēs, *Lysistratē* 632-4

ΧΟ.ΓΕ. καὶ φορήσω τὸ ξίφος τὸ λοιπὸν ἐν μύρτου κλαδί,  
ἀγορήσω τ' ἐν τοῖς ὅπλοις ἐξῆς Ἀριστογείτονι,  
ὧδέ θ' ἐστήσω παρ' αὐτόν·

老爺のコロス 今後は刀をてんにん花の枝のあいだに隠し持ち、  
アリストゲイトンといっしょになって鉄兜にいかめしく、  
市場で買い物、ほうらこのように彼の側にふん構え、

先に『蜂』1225行でハルモディオスの名が出ましたが、ここのアリストゲイ

トーンとともに、御存知、僭主殺しを企てた（前 514 年）恋人同士です。この二人の義挙はいくつかのスコリオンに歌われているのですが、上の 632 行はそのうちの二つの出だしの引用なのです。その一つを引いてみます。

(10) Scolion 12 (Carmina Convivalia) P.M.G. 895 <sup>11)</sup>

ἐν μύρτου κλαδὶ τὸ ξίφος φορήσω

ὥσπερ Ἀρμόδιος κάριστογείτων

ὄτ' Ἀθηναίης ἐν θυσίαις

ἄνδρα τύραννον Ἴππαρχον ἐκαινέτην.

ギンバイカの小枝のあいだに剣を隠し持とう、

ハルモディオスとアリストゲイトーンが

アテーナー様の大祭の日、

僭主ヒッパルコスを討ったときのように。

ヒッパルコスとは僭主ヒッピアースの弟ですから、僭主殺しには失敗したのですが、ペイシストラトス一族の独裁政権は3年後に倒れたため、二人は、死後、アテーナイの解放者と称えられました。さて、その二人が、当時、実際に「ギンバイカの小枝のあいだに剣を隠し持」ったのでしょうか。トゥーキューディデースはこの事件にも一家言を持っている史家（『戦史』1.20, 6.53 ff.）ですが、ギンバイカへの言及はありません。おそらく史実ではないのでしょうか。ですが、小枝が密生するギンバイカを普段から目にしているギリシア人には、あのなかに武器を隠すというのは、ごく自然な発想だったのではないのでしょうか。独裁制打倒という大仕事とギンバイカの組み合わせ、そこには古人のこの植物に寄せる一方ならぬ愛情が感じ取られるように思われます。

—つづく—

## 注

- 1) テンニンカは東南アジア原産の常緑低木で、赤い花をつけます。私は小石川の植物園で見たことがあります。
- 2) 磯野直秀『日本博物誌総合年表』（平凡社、2012）には、残念ながら、ギンバイカは記載されていませんでした。
- 3) 樹高は『園芸植物大圖鑑』の「3～5mになる」のほうが適切と思われます。
- 4) 訳文は小川洋子氏のもので、『テオプラストス 植物誌 2』（西洋古典叢書、2015）、27頁より引用。同書には正確な訳文の他、驚くべく大量かつ詳細な注が付されています。なお、引用文中の *μύρτινος* は、普通は形容詞ですが、ここでは名詞として用いられています。
- 5) 同じく小川洋子氏の訳文です。27頁より引用。
- 6) 同上、244頁より引用。
- 7) プリーニウス『博物誌』15.122 はカトーのこの箇所を引いて、*myrtus conjugula* は *fortassis a conjugiiis* 「ことによると婚姻にちなむものか」と記していますが、具体的にはどんなギンバイカかはよく分かりません。
- 8) アリストパネースの訳文はすべて『世界古典文学全集 12 アリストパネース』（筑摩書房、1964）所収のもの。(4) (8) (9) は高津春繁訳、(6) は田中美知太郎訳です。
- 9) D. Campbell (ed. & tr.), *Greek Lyric V* (The Loeb Classical Library, 1993)、p.274 より引用。なお、Plutarkhos, *Symposiaka* (lat. *Quaestiones Convivales*) 1.5 にも、ほぼ同趣旨の記述があります。柳沼重剛編訳『プルタルコス 食卓歓談集』（岩波文庫、1987）、21-2頁参照。プルタルコスは、宴会で回される「天人花の小枝」は「アイサク司 *aisakos* と呼ばれる」と述べていますが、*αἴσακος* はこのこと、5世紀の Hēsychios (lat. Hesychius) の辞書に出るのみの語です。
- 10) 『世界古典文学全集 12 アリストパネース』（注8）、170-1頁。なお、『プルタルコス 食卓歓談集』（注9）では、スコリオンに「回し歌」の訳語があてられています。
- 11) スコリオンの番号は D. Page (ed.), *Poetae Melici Graeci* (Oxford, 1962) のそれです。*Greek Lyric V* (注9) p.286 にも、*P.M.G.*の通し番号 895 を付して収められています。